

文・皿木喜久

題字・藤渡辰信

紅陵に命燃ゆ

ロシア風の建物が残る現代の大連市内。満鉄の本社があった



歴史に残る「シンクタンク」

後藤や2代目総裁の中村是公らによって経営基盤を整えた満鉄はその後、事業を着々と拡大していく。「本業」の鉄道部門では、満州の張学良政権が満鉄に対抗して敷いた鉄道を次々と吸収する。昭和7年の満州国建国後は中国との連の共同経営下にあった東支鉄道も買収、満州全土の鉄道をその管理下に置くことになった。

その9 満鉄調査部

その飛躍ぶりを象徴するのが、特急「あじあ号」である。昭和9年、満鉄が開発した新型の蒸気機関車だ。流線型の覆いがあり、時速82・5キロと当時としては抜群のスピードを誇り、南の大連から北のハルビンまで944キロを14時間足らずで結んだ。曠野を疾走する雄姿は、当時満州で暮らした人々にとって忘れられない思い出となっている。

小林英夫氏の『満鉄調査部』（平凡社新書）によると、創立直後は経済調査、旧債調査、ロシア調査の3班に分かれ、外に監査班と統計班があった。スタッフは計100人前後だった。

調査部が重視された理由としては「多分に後藤の個性が反映されている」という。欧米並みの大企業であれば、それ相応の調査部を持つのは当然と考えていた。日露戦争後の満州の政治情勢は不安定で欧米列強の干渉も激しい。情報を正確に把握し方針を立てていくには、台湾以上に調査部の活動が不可欠と判断していたのだ。

昭和14年4月には「大調査部」に発展させ、スタッフは2千人をの盧溝橋事件で日中戦争が始まると、調査範囲を満州から華北さらに中国全土へと広げ、上海にまで調査室が設けられた。

後藤の「個性」で調査重視
鉄道ばかりでなく、石炭の採掘や製鉄など鉱工業にも進出、満鉄コンツェルン、満鉄王国などと言われた。関東軍と車の両輪のように、日本の満州進出に極めて重要な役割を果たした。

その方式を満鉄という満州の運命を左右する国策会社に組織的に持ち込んだのである。「満鉄調査部」は改編・改称を重ねながら拡充し、満州国成立後は満州経済建設計画の調査・立案などに当たった。さらに昭和12年

中でも歴史的調査とされているのが昭和14年5月にスタートした「支那抗戦力調査」である。その名の通り、日中戦争で中国側はどこまで日本と戦えるかという調査だった。

1年がかりでまとめられた報告書は5編からなり、400字詰め原稿用紙換算で2425枚に上る（小林氏『満鉄調査部』）膨大なものだった。内容も中国の民族問題、軍事力、戦時経済など広範で満鉄の底力を見つけた。

飛躍を続けた南満州鉄道
もう一度、後藤新平に登場してもらわねばならない。今度は南満州鉄道株式会社、通称「満鉄」の初代総裁としてである。



満鉄総裁もつとめた後藤新平

明治38（1905）年、日露戦争に勝利した日本はポーツマス条約により、満州の大連・長春（郊外寛城子）間の鉄道とその沿線付属地を手に入れた。ロシアが建設した東清鉄道のほぼ南半分である。日本政府は初め、鉄道王と言われた米国のエドワード・ハリマンの提案を入れ、共同でこれを経営する予定だった。ところがポーツマスから帰国した外相、小村寿太郎の猛反対で流れ、清国との間で条約を結んだ上、半官半民の会社

で運営することになった。満鉄の誕生である。設立は翌明治39年の11月だった。その最高経営者にあたる総裁について、満州経営委員会の委員長をつとめた見玉源太郎は、後藤を据えることに説得にあたる。

昭和初期の満鉄本社。調査部はこの向かい側にあったという。



熊谷康（くまがや・やすし） 明治43年、静岡県磐田郡生まれ。昭和8年、拓殖大学を卒業。在学中から満州などを旅行、その旅行記を新聞に発表した。後に北支那派遣軍司令官などをつとめる軍人の根本博の知遇を得て上海の日本大使館武官室に通訳官として勤務、11年、満鉄上海事務所調査室に移る。戦後は郷里で地域計画に従事、豊田町農協組合長などをつとめた。

満州の東洋協会系学校

日露戦争後の明治43（1910）年、大連と旅順にそれぞれ東洋協会大連商業学校と東洋協会旅順語学校が開校した。さらに大連商業学校には大正7年女子部が付設、昭和5年大連女子商業学校となった。大連商も大連女子商もともに英語のほか中国語やロシア語を選択し学べた。一

方、旅順語学校には、日本人に中国語、清国人に日本語を教えるクラスがあった。いずれも地域的な実業教育の国際学校だった。また満州国建国後の昭和8年には、奉天（瀋陽）に主に日本人の子弟の中等教育のため東洋協会奉天商業学校ができた。大連商業、奉天商業とも卒業後、拓殖大学に進学した者が多いという。

ただ満鉄調査部は、部内にマルクス主義者が数多く集まっているとして関東憲兵隊の力がかりな取り締まりを受け、急速に力を失う。汪兆銘政権も日本の敗北とともに崩壊した。卒業生らもその活躍の場を追われた。しかし、日本に帰った彼らはその経験をもち、戦後日本の産業や地域の蘇生に大きな力を発揮したのである。（毎週土曜日掲載）

拓殖大学の卒業生には、初代総裁の後藤が大正から昭和にかけ学長をつとめたこともあり、熊谷らのように満鉄で活躍した者は、多かった。さらに中国語に堪能で重慶の蒋介石政権に対抗する親日政権として日本が支持した汪兆銘政権に協力した者もいた。

しかも結論は「日本は中国に対して負けることはないにしても、圧倒的勝利を収めることはできない」という、当時としてはきわめて大胆なものだった。この調査に貿易・商業部門で参加した一人に熊谷康がいた。熊谷は拓殖大学で宮原民平教授から中国語を学び、満州旅行をするうちに中国研究に傾斜する。昭和8年に卒業後、上海の日本大使館通訳官を経て、満鉄上海事務所調査部に転じている。